

機関番号：32675
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520339
 研究課題名（和文）：柳宗元の古文研究—訓読と解釈—
 研究課題名（英文）：Research on the Classical Literature of the Chinese Poet Liu Zongyuan: Japanese Readings of the Chinese Text (*Kundoku*) and Interpretation
 研究代表者
 黒田 真美子 (KURODA MAMIKO)
 法政大学・文学部・教授
 研究者番号：90308007

研究成果の概要（和文）：中国唐代後期を代表する文人である柳宗元(773-819)の古文を研究対象に、先行研究と一線を画して、一字一句を精査分析し、その文意を最も的確に表し得る訓読はいかにあるべきかを追求するという研究目的を、概ね達することができた。

研究成果の概要(英文)：This article undertakes a careful analysis and interpretation of classical literature written by Liu Zongyuan (773-819), one of the most celebrated poets of the Chinese Tang Dynasty, employing a level of detail that distinguishes it from previous, more general studies. We believe that we have largely succeeded in establishing the best way of communicating the meaning of the Chinese text in Japanese *kundoku* style.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：「柳宗元」「古文」「訓読」「中唐」

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国唐代後期を代表する文人である柳宗元(773-819)は、周知の如く、韓愈(768-824)と共に所謂<唐宋八家>の唐代の双璧を成している。爾来、柳文は中国の文人にとって、古文の典範として高く評価され、研究されてきた。日本に於いても、現代に至るまで、その研究は絶えることがない。すなわち柳文研究は、古来より日本中国ともに枚

挙に暇無いが、当該研究目的と関連する領域に限定して、比較的新しく且つ特筆すべき文献を挙げるならば、清・沈徳潜編次評点『唐宋八大家読本』巻七～九所収柳文、高歩瀛『唐宋文学要』巻四所収柳文などである。とくに前書は、江戸・寛政年間に日本に伝えられ、全国的に流布された。さらに明治大正期から現代に至るまで、その訳注本が刊行されている。ただ採録されているのは、49篇に過ぎな

い。現在一般に通行している呉文治等校点『柳宗元集』（中華書局、1979）所収の柳文は、476篇（外集上下所収を除く）である。すなわち、知名度に比して、柳文の精密な訳注はわずか1割に過ぎないのである。これは韓愈が同書に94篇収録されていることと単純に比べてもすくないといえよう。当該研究はそれを補うべく、企図された。

（2）訓読に関しては、『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』（南宋・魏中舉本）を室町・嘉慶元年（1387）に覆刻したものに、訓点・訳注が付されている。また和刻本漢詩集成巻五・六（汲古書院、1975）所収『唐柳河東集』は、明・蔣之翘本を江戸・寛文4年（1664）に覆刻し、それを影印したもので、鶴飼信之石齋の訓点が付されている。訓読には、平安朝初期以来の長い歴史があり、時代とともに変容している。現代の訓読の基礎となったのは、江戸時代中期に、山崎闇齋・後藤芝山・佐藤一齋など当時の儒者たちが考案した訓読である。だが明治45年（1912）「漢文訓読に関する調査報告書」（文部省官報）に基づく現代の訓読からみれば、それらの訓読や石齋訓点も隔世の感を否めない。それゆえ、当該研究は、現代の訓読に拠る柳文解釈を志した。

2. 研究の目的

上記の背景（1）（2）を踏まえて、（1）に関しては、新たに柳文の精細な訳注を試みることに、（2）に関しては、その内容を的確に表し得る現代の訓読を追求することを目的とした。

3. 研究の方法

（1）上記の目的を遂行するために、2003年7月より、ほぼ、1ヶ月に1回、研究代表者の恩師、竹田晃東京大学名誉教授の指導の下、柳文の読書会を開催した。科研費交付後の2008年以降は、具体的には、13名の研究協力者（当時、院生・非常勤講師など）が、対象作を担当して、訓読・日本語訳・語注を準備して発表し、それについて問題点を剔抉し、研究分担者も参加して、分析考察を深めた。

（2）方法論としては、縦糸として、石齋訓点などの先行研究や、四庫全書検索を用いて過去の用例を調査参照し、横糸としては、『柳宗元全集』などから柳自身の用例を調査して、精確な内容把握に努めた。

（3）以上の研究会を継続していく中で、研究会の記録を残すとともに、研究成果を出版することを決めた。そのために必要な表記・凡例作業のマニュアル作成を始め、それらの中心となる事務局を設立して、研究体制を整えた。

4. 研究成果

上記3において、研究方法について具体的に記述したが、それらの方法を用いて、上記2の目的を概ね達成できたと自認している。経過などについて、補足すれば、以下の通りである。

（1）2008年度：08年度に至るまでの足かけ5年の研究蓄積（『柳宗元集』巻16, 17, 18, 19所収作品25篇）を整理して、問題点を洗い出し、その解決に向けて、より精細な調査を行い、それを踏まえて、分析考察を深めることができた。

また研究代表者・分担者の役割分担を決め、さらに研究協力者13名が担当する対象作品を選定して、研究体制の樹立を図った。その結果、活発な議論を踏まえて、充実した成果を上げ、それらを記録として保存することができた。

（2）2009年度：09年度からは、出版を目指して、研究協力者各自が、担当作品の訓読と解釈を中心に原稿を作成し、研究会で問題点を再検討し、より精度を高めることができた。また同時に、表記上の取り決め（字体・形式・引用の仕方など）を細部に亘って話し合い、全員の合意の元にマニュアルを作成し、上梓に向けて、より着実な第二段階を踏むことができた。

また出版に向けて、上記の25篇に加えて、新たに5篇（「説車贈楊誨之」「謫龍説」「復呉子松説」「罷説」「觀八駿圖説」）を追加することに決め、来秋の上梓に向けて、さらに充実した内容を目指した。

（3）2010年度：前半は、出版対象作品30篇の中で、未だ定稿に至らなかった作品について、再検討会を開催して、質疑考察し、修正稿を完成するとともに、新たに追加した5篇についても原稿検討を行った。

後半は、修正稿を研究代表者・研究協力者が各自分担して添削（下記参照）後、竹田晃名誉教授が、最終的にチェックして完成稿とし、それらを事務局に集めて、細かい表記・体裁の統一感を図るべく、総覧した。

添削担当者とおよび原稿作成者は、下記の通りである。

*せん満江研究協力者担当：8作品

相野谷智之 「罵尸虫文」（巻18）「逐畢方文」（巻18）

福田素子 「弔楽毅文」（巻19）

上原究一 「招海賈文」（巻18）「愬子文」（巻18）

遠藤星希 「辨伏神文」（巻18）

高芝麻子 「宥蝮蛇文」（巻18）「憎王孫文」（巻18）

*市川桃子研究協力者担当：5作品

田中智行 「弔蓑弘文」（巻19）

福田素子 「弔屈原文」（巻19）

溝部良恵 「斬曲几文」（巻18）「哀溺文」（巻18）

(巻18)

- 山崎藍 「乞巧文」(巻18)
*黒田真美子研究代表者担当: 17作品
周重雷 「梓人伝」(巻17)
山崎藍 「李赤伝」(巻17)
遠藤星希 「天説」(巻16)「説車贈楊誨之」
(巻16)
大野公賀 「宋清伝」(巻17)
大村和人 「虫負虫版伝」(巻17)
梶村永 「捕蛇者説」(巻16)
周重雷 「乗桴説」(巻16)「観八駿図説」
(巻16)
田中智行 「童区奇伝」(巻17)
高芝麻子 「祀朝日説」(巻16)「復呉子松
説」(巻16)「種樹郭タク駝伝」(巻17)
福田素子 「サ説」(巻16)「謫龍説」(巻
16)
山崎藍 「鶻説」(巻16)「罷説」(巻16)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ①市川桃子「日本漢詩之語言——江戸時代的資料」(中国語)『明海大学外国語学部紀要』明海大学外国語学部、査読無、2011年3月(単著)、vol23、p111-116
- ②黒田真美子「柳宗元の<狂>について——「李赤伝」を中心に——」『法政大学文学部紀要』査読無、第61号、2010年10月、pp.1-21
- ③古田島洋介「漢文教育の内憂外患」『国語問題協議会報「国語国字」』査読無(依頼原稿)、第194号、2010年9月、pp.11-27
- ④せん満江「李商隠と柳枝」『杏林大学外国語学部紀要』査読有、第22号、2010年pp.11-26
- ⑤せん満江「新井白石青年期の読書と詠詩」『杏林大学外国語学部紀要』査読有、第23号、2010年、pp.1-13
- ⑥古田島洋介「漢文訓読の固定性と流動性——複数訓読共存原理——」『明星大学紀要 日本文化学部・言語文化学科』査読有、第17号、2009年3月、pp.1-19
- ⑦古田島洋介「梁啓超『和文漢読法』(盧本)簡注——復文を説いた日本語速習書——」『明星大学紀要 日本文化学部・言語文化学科』査読有り、第16号、2008年3月、pp.29-64

[学会発表] (計7件)

- ①古田島洋介「日本漢詩——近代化の萌芽と

挫折」東アジア比較文化国際会議 2010 日本大会、橿原市・橿原ロイヤルホテル、2010年10月25日

②市川桃子「柳宗元和日本漢詩」(中国語)柳宗元国際学会 中国・永州、2010年10月12日

③黒田真美子「韋應物の悼亡詩について」お茶の水女子大学中国文学学会、お茶の水女子大学、2010年9月4日

④古田島洋介「纏足の再把握——身体論としての視点を求めて」国際日本文化研究センター共同研究会、牛村圭教授班「文明と身体」、京都市・国際日本文化研究センター、2010年7月31日

⑤市川桃子「日本漢詩之語言——江戸時代的資料」(中国語)中国社会言語学会国際討論会 中国・青海省、2010年7月18日

⑥古田島洋介「潘飛声をめぐって——ベルリン大学附属<東洋語学校>講師時代」国際日本文化研究センター共同研究会: 稲賀繁美教授班「東洋美学・東洋の思惟を問う」、京都市・国際日本文化研究センター、2010年6月26日

⑦古田島洋介「現代中国語教育と伝統的漢文読解方式」第10回会「東アジア比較文化国際会議」ソウル大会、ソウル市・高麗大学校、2008年10月25日

[図書] (計2件)

- ①黒田真美子『聊齋志異(1)』明治書院、中国古典小説選9、2009年4月、442頁
黒田真美子・竹田晃『聊齋志異(2)』明治書院、中国古典小説選10、2009年10月、167-400頁
- ②黒田真美子『閱微草堂筆記・子不語・続子不語』明治書院、中国古典小説選11、2008年7月、447頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 真美子 (KURODA MAMIKO)
法政大学・文学部・教授
研究者番号: 90308007

(2) 研究分担者

市川 桃子 (ICHIKAWA MOMOKO)
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20212996

せん 満江 (SEN MITSUE)
杏林大学・外国語学部・教授
研究者番号：90206657

古田島 洋介 (KOTAJIMA YOUSUKE)
明星大学・日本文化学部・教授
研究者番号：60211900
(平成 20 年度のみ)
(平成 21 年度のみ連携研究者)
(平成 22 年度から、明星大学・人文学部・
教授)